桜美林大学　大学教育開発センター
Newsletter
No.26
J.F.Oberlin Faculty Development Center Newsletter
2018年3月31日

Contents ▶
1 第19回学内シンポジウム「桜美林大学の学生と教育―10年間の変化と現状―」の開催　2 大学コンソーシアム京都第23回FDフォーラム「FDのこれまでと、これから～多様な角度からFDについて考える～」参加報告　3 「学生FDサミット2018春」（法政大学市ヶ谷キャンパス）参加報告　4 2年間を振り返って　5 活動日誌

1　第19回学内シンポジウム「桜美林大学の学生と教育―10年間の変化と現状―」の開催

大学教育開発センター長 兼 FD/SD 部門主任
心理・教育学系／大学アドミニストレーション研究科　教授　鈴木　克夫

2018年2月21日（水）、第19回学内シンポジウム「桜美林大学の学生と教育―10年間の変化と現状―」を開催しました。参加者は23名（内・大学教育開発センター研究員12名）で、内訳は教員15名、職員8名でした。

設置から10年を迎えた大学教育開発センターでは、IR部門の活動の一つとして本学の学生と教育に関するデータを蓄積してきました。毎年の基本データを集約したものが『桜美林大学Fact Book』であり、今年度版が10冊目となります。また、学群1・2年生を対象に実施している調査「大学生基礎力レポート」や、日常の教育活動・学習活動の集約としてのGPA（Grade Point Average）の分析も、数年来続けております。

今回のシンポジウムでは、『Fact Book』に蓄積されたデータの分析から、この10年で本学の入学状況や教育条件がどのように変化したかを把握しました。次いで、「大学生基礎力レポート」の分析から、本学に入学した学生の特徴を学群別に明らかにしました。さらに、学修成果としてのGPAが学年が上がるにつれてどのように変化しているか、また、そのような変化が以前の学生と最近の学生とではどのように異なるかを検討しました。

はじめに、大学アドミニストレーション研究科教授／大学教育開発センターIR部門主任の浦田広朗氏による報告「この10年で何が変わったのか？―Fact Bookデータの分析から―」がありました。具体的には、①入学状況（志願倍率・合格率、入学率・入学定員充足率、地域別入学者数）、②教育条件（ST比）、③就職状況（就職率、就職決定率・就職希望率）の10年間の変化がデータに基づいて提示され、本学の課題が明らかになりました。

続いて、リベラルアーツ学群教授／大学教育開発センターIR部門研究員の藤川まなみ氏による報告「学群別にみる2017年度入学生の傾向―大学生基礎力レポートからの分析―」がありました。具体的には、2013年より入学者全員と2年生を対象として実施しているベネッセ大学生基礎力レポートの2017年度入学者データから、①基礎学力の現状、②学ぶ目的、取得したいスキル、大学で力を入れたいこと、③興味・関心の一致度、④読書習慣、高校までの学習習慣、学生生活の不安、について学群別に比較したデータが提示され、さらに2013年度入学生との比較が提示され、今後の課題が明らかにされました。

最後に、人事部長／大学教育開発センターIR部門研究員の鳥居聖氏による報告「GPAからみた学修成果の変化」がありました。具体的には、2013年春学期の各学群4年生と2017年春学期の各学群4年生の1セメスター目のGPAと通算GPAを比較したもので、1セメスター目のGPAと4年春学期（7セメスター以降）や通算GPAとの相関係数が高く、1セメスター目のGPAで大学卒業時のGPAが決まる状況が提示されました。入学後の4・5月の学習習慣が学業に大きく影響していることから、入学前教育や入学後のオリエンテーションでの修学指導において、学習習慣の未習得者を選別するなどして、成績不良者を出さない仕掛け作りが必要であるとの提言がありました。

その後、リベラルアーツ学群准教授／大学教育開発センターIR部門研究員の大中真氏の司会により、質疑応答と全体での討議が行われ、参加者は少なかったものの充実した内容のシンポジウムとなりました。今回のシンポジウムが本学の教育改善の方向を考える手がかりになれば幸いです。

2 大学コンソーシアム京都第23回FDフォーラム「FDのこれまでと、これから～多様な角度からFDについて考える～」参加報告

大学教育開発センターFD/SD部門研究員
法学・政治学系／リベラルアーツ学群　教授　阿部　温子

2018年3月3日～4日に京都産業大学で開催されたFDフォーラムへの参加報告を以下にまとめる。

第1日目は、シンポジウム「FDのこれまでと、これから～多様な角度からFDについて考える～」というテーマでの登壇者4人による発表およびパネルディスカッションであった。文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐の林剛史氏は、政策的な観点からという副題で、この10年ほどの状況および変化について、特に法的側面から解説した。京都橘学園理事長の梅本裕氏は「これからのFDへの期待～体験的FD論」として、自身の経験を踏まえ、どのような教員を望むのかについて語った。大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部准教授の佐藤浩章氏は、「未来の大学教員・未来のFD ～ 2030年に大学教員に求められる能力とその開発法の予測～」と題し、未来の大学教員を4類型に分け、それぞれどの程度の割合で各大学は教員リソースを必要とするかを示した。また、未来のFDは概念的拡張が予想され、授業・教育における能力だけでなく、社会関与（ファンドレイジング）やマネジメント能力の開発も含まれるだろうとのことであった。そして関西大学教育推進部教授の森朋子氏は、学習研究の視点からという副題で、学生の学びの質向上こそがFDの目的と見定め、そのための実践的な仕掛け・工夫について報告した。

このように密度の濃いそれぞれの発表内容もさることながら、コーディネーター（京都橘大学教育開発支援センター講師西野毅朗氏）もパネルディスカッションにおいて非常に巧く質問を構成して登壇者間の実のある対話が引き出されるように導いていた。特に興味深かった点をいくつか挙げると、まず一つ目は林氏による出口への注目の仕方で、就活が大学での学びを侵食している限り、学びへの姿勢は変わらず、また高校が大学受験準備にのみ拘泥している限り、高校での学びが変わることもないだろうという見解であった。次に、森氏の指摘として、現在の大学のシステムは、主体的学びを求めるといいながら、スタンプラリーのように単位を取らせるようになっており、それでは目的を達成できない、タスクベースで卒業・学位取得への負荷を大きくすれば学生は勉強することが強調された。この点は、この10年間でFDが実践されてきた中で統計では学生の学習時間は減少しているという指摘に対し、全国レベルの統計を国際比較で使用するときには意味のあるデータであっても、FDの成果を学習時間という量で測ることは、無意味であり、FDが目指しているのは学習の質、学生にとっての到達であるという反論に結びつくものであった。また、FDの中核的な意義として、「教授能力資格」についても議論されたが、梅本氏が指摘したように、そのような資格はFacultyとしてのautonomy（自治）が保証すべきものであり、国の法令として定めるべきではない。実際、ヨーロッパでは教授資格という制度は存在するが、あくまでも大学の自治の中で設定されるものであり、かつて唯一の例外としてスウェーデンで法令によって設置されたものの10年後には廃止されたとのことである。さらに付言すれば、法令廃止ののちにむ

しろ研修は強化され、まさに大学の自治の力によって、教育機能の強化がなされた。

2日目は第3分科会「リベラルアーツ教育の展望」に参加した。午前中の2つの発表は、それぞれの大学におけるリベラルアーツ教育についての説明・解説が主たる内容であった。国際基督教大学教養学部長毛利勝彦氏は、ICUにおけるリベラルアーツの21世紀的展開について発表した。リベラルアーツとはという問いに対し、ミケランジェロの言葉を引いて「学生の中にある可能性（真・善・美）を掘り出す」こととしたが、これは桜美林におけるリベラルアーツにとっても見つめなおす点であろう。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院副研究教育院長の室田真男氏は、「東京工業大学におけるリベラルアーツ教育の試み」として、学士課程だけでなく修士・博士課程の学生に対するリベラルアーツ教育の実践について説明した。午後は一つの発表と総括討論があり、京都精華大学人文学部総合人文学科講師の白井聡氏が「リベラルアーツ教育は何を目指すのか？」というタイトルで、より広く日本社会全体を対象として、現在のネオリベラリズムの支配的状況およびその表れとしての日本における反知性主義と人文学への憎悪に対する警告を強く発した。また、アクティブ・ラーニングが実際には受動的な学生を作り出してしまっている（指導に従って作業を行うだけ）危険性についても触れ、大学教育における様々なブームに対して批判的な振り返りの重要性を指摘した。

3 「学生FDサミット2018春」（法政大学市ヶ谷キャンパス）参加報告

大学教育開発センターFD/SD部門研究員
人文学系／リベラルアーツ学群　講師　田中　一孝

2018年3月8日、9日に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて「学生FDサミット2018春」が開催されました。本学からは鈴木克夫・大学教育開発センター長、犬飼佳宏・同研究員、田中一孝・同研究員、さらにリベラルアーツ学群3年の白井誠也さんの4名で第一日目に参加しました。学生FDサミットには2017年秋（金沢星稜大学）にも本センター研究員が参加し、昨年9月には木野茂・元立命館大学教授や学生FDに深く関わって来られた方々をお招きし、本学でシンポジウムを開催しました（シンポジウムの詳細な報告は3月発行の『年報』に掲載されます）。今回の学生FDサミットへの参加の目的は昨年度のシンポジウムの開催報告と、本学における学生の教育改善参画の現状について分科会にて発表することでした。

分科会に先立って、服部憲児氏（京都大学教授）より基調講演がありました。服部氏は高等教育の研究者としてだけでなく、前任校の大阪大学における「パンキョー革命」に深く関わったことで知られていますが、「パンキョー革命」において学生たちがどのように教育改善に主体的に参画したのか、興味深いエピソードとともに紹介されていました。他方、現所属の京都大学では学生FD活動の推進に非常に苦心されたとのことです。そうした経験を踏まえて服部氏は、学生FD活動を広げていくには学生が自然と取り組みたくなるような「仕掛け」が重要であることを、松村真宏氏（大阪大学准教授）が提唱する「仕掛学」に言及しながら論じました。

本学の分科会発表の様子

白井 誠也さん

ポスターセッションの様子

基調講演後の分科会は4大学が2回ずつ発表するという形式を取り、本学も「公開シンポジウム『FDのさらなる発展を目指して―学生FD活動について考える―』の開催と桜美林大学における学生FD活動について」という題目で2回発表を行いました。この発表では標記シンポジウムの開催を踏まえて、教員、職員、学生という3つの立場から、本学で学生FDを実施する可能性とその意義について論じました。発表後には質疑応答があり、他大学で学生FDに関わる学生たちから、白井さんが携わってきた活動や、今後の計画などについて、積極的な質問がありました。

学生FDサミットは非常に活気のあるイベントで、約300～400人が参加していたかと思います。ポスターセッ

ションでは、人が会場から溢れんばかりで、学生と教職員が熱を込めた議論をしていたのが印象的でした。本学はまだ学生FDを組織的に実施しているとは言えない状況ではありますが、他大学の取り組みを知ることで、学生が教育改善に参画する意義について認識を深める機会となりました。

4　２年間を振り返って

大学教育開発センター長 兼 FD/SD部門主任
心理·教育学系／大学アドミニストレーション研究科　教授　鈴木　克夫

大学教育開発センターは、本学の授業（大学院の研究指導を含む）の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究を支援・推進すること、ならびに本学の教育活動等の状況を明らかにして、広く国内外の理解と支持を得るための諸施策を支援・推進することを目的として、2008年度に設置されました。したがって、今年度は10年目という節目の年でした。また、個人的にも、センター長を拝命して任期の2年目を終えることになります。

センター長就任にあたり、運営方針として、①研究機能の強化、②活動の継続性、③学内の各教育組織および事務組織、他大学、他機関との連携の強化、の3つを掲げさせていただきました。もちろん、いずれも道半ばではありますが、この2年間を振り返ると、いくつかの成果を上げることができたのではないかと自負しています。

FD/SD部門では、昨年度は「SDの義務化」、今年度は「学生FD」を公開シンポジウムのテーマとして選び、部門内で議論を重ねることで魅力的なプログラムを策定し、結果的に学内・学外から多くの参加者を得ることができました。また、IR部門では、2年間にわたって『Fact Book』のデータを分析、検討し、学内シンポジウムを開催するとともに、『年報』に論考を掲載することができました。加えて今年度は、大学生基礎力レポートおよびGPAについても分析を行い、学内シンポジウムで問題提起をさせていただくことができました。明星大学との大学間交流についても、授業公開への参加、キャンパス見学、合同ゼミの実施、職員間の情報交換会の開催など、２年間を通じて有意義な成果を上げることができました。さらに、大正大学とも合同フォーラムを開催するなど、連携を深めています。学内の各教育組織との連携については、昨年度はビジネスマネジメント学群との共催でFD研修会を開催するとともに、今年度は学群長へのインタビューを行い、『年報』に掲載させていただきました。

大学教育開発センターの10年間、そしてセンター長を務めさせていただいたこの2年間を通じてセンターの活動に関わった研究員の皆さんに感謝申し上げるとともに、ささやかなこの成果が来年度以降も引き継がれることを願っております。

5　活動日誌

・2月 7日（水）第9回全国高等教育研究所等協議会報告会・総会、公開講演会（於・兵庫大学）参加（研究員2名）
・2月19日（月）『Fact Book 2017』刊行
・2月21日（水）第19回学内シンポジウム「桜美林大学の学生と教育―10年間の変化と現状―」開催（研究員12名）
・3月 3日（土）・4日（日）大学コンソーシアム京都第23回FDフォーラム「FDのこれまでと、これから～多様な角度からFDについて考える～」（於・京都産業大学）参加（研究員1名）
・3月 8日（木）学生FDサミット2018春～みんなで創る学生FDサミット～（於・法政大学）参加・分科会報告（研究員3名）
・3月31日（土）『年報』第10号（2017年度）刊行

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758　其中館1階 101
E-mail：fdcenter@obirin.ac.jp　Web：http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/